Hocking, Clare（2009）

The Challenge of Occupation: Describing the Things People Do

Volume 16, Issue 3, Page 140-150

作業についての課題：人の生業を説明すること

本論文は，作業科学研究者が学問の創立者としてのビジョンを持つためには，人の作業従事に関する研究ではなく，作業そのものに関する知識を生み出すことに専心するような，新たな道筋の研究と学識を発展させなければならないということを提案するものである．目標は，作業科学と作業療法との両者に，人が取り組む作業，そして作業の影響（力）や重要性に関する知識を提供することである．そのような研究は，社会参加に必要な可能性，知識，技能を包含するであろう．例えばそこには，誰が参加し何をするのか，参加に影響を与える習慣・規範・過程，いつ・どこで社会参加が起こるのか，どんな資源を使うのか，その秩序・期間・進み方・段階，その作業の由来，作業の機能と結果，作業が持つ意味の種類，作業の社会文化的・政治的・経済的・地誌的・歴史的文脈，作業がどのように健康に関与するのか，といった事柄が含まれる．標準的な仮説を捨て，作業的公正（occupational justice）に貢献し，持続可能性（sustainability）の問題への配慮など，この知識体系を生み出すにあたっての倫理的責任が概説された．この独特の知識体系の構築には，学際的な知識の統合と作業についての客観的主観的根拠の集積の双方を必要とする（埼山　美和）．

Key Words : Occupational form（作業の形体），Context（背景），Meaning（意味）， Occupational science research（作業科学研究），Occupational therapy（作業療法）

Translated by Miwa Sakiyama, OTR, MSc
Rihabiri-Kikaku L．L．C．

Pickens, Davel Noralyn & Pizur-Barnek, Krisow（2009）
Co-occupation: Extending the Dialogue
Volume 16, Issue 3, Page 151-156

共作業について：検討を始めよう

共作業はこれまで詳細に研究され理解されることがなかった概念である．ここでは，共作業の従事には，意味の共有に伴い，身体の共有，感情の共有，意志の共有という側面が含まれるという特徴を前提とした，新しい定義を提示する．先行論の検討と熟考を通じて，共作業の各側面を探っている．共作業の理解をすすめるために以下の３つの命題が提案される．１）共作業には幅があり，各タイプの共作業は特有な側面で特徴づけられる．２）共作業の性質は量的研究あるいは質的研究を通して理解されるかもしれない．３）一生涯にわたる損失（impairment）や障害（disability）は共作業がどのように表われるかに影響を及ぼし，このことがリサーチや臨床実践に意味を持つ．タイトルが示すように，我々はこれらの考えを，共作業の知識や理解を深める検討を始めるためのものとして述べている．
（訳：小田原　悦子）

Key words:　Co-occupation（共作業），Theory development（理論構築）

Translated by Etsuko Odawara, PhD, OTR/L
Division of Occupational Therapy, School of Rehabilitation Sciences
Seirei Christopher University

Pizur-Barnekow, Kris & Knutson, Jamie（2009）

A Comparison of the Personality Dimensions and Behavior Changes that Occur During Solitary and Co-occupation

Volume16, Issue 3, Page157-162

個別作業と共作業における性格（personality）と行動変化の比較

目的：この先駆的研究は作業従事における生理学的，心理学的，行動的側面を探る大規模なリサーチプロジェクトの一部である．ここに報告する研究の目的は，共有される活動（共作業）と個別活動（個別作業）の参加における，行動と性格（personality）特性の違いを調べることである．方法：19-24 歳の健康な大学生が 2 種類の従事レベル（個別と共作業）の Yahtzee*に参加した．行動はビデオに録画され，コード化，分析された．性格の型は NEO-FFI を使って決められた．ノンパラメトリックス統計を使って，各学生の個別および共作業に従事しているときの行動の違いを決定した．パーソナリティー，行動，従事レベル間における相関と有意差を決定するために，スピアマンと T 検定を使った．結果：共作業の行動と個別作業の行動には統計的に著明な差異が見られた．性格の型に関する著明な差はなかった．結語：共作業でのゲーム従事は，情報交換の行動，身体行動に影響を及ぼすかもしれない．この研究所見は，共作業は身体面と情緒面の共有によって特徴づけられるという Pickens and Pizur-Barnekow のモデルを支持する．(訳：小田原　悦子)

*訳者註：Yahtzee とは，ソリタリスと類似のコンピュータゲームである．

Key words: Co-occupation（共作業），Personality（パーソナリティー），Information exchange（情報交換），Physicality（身体性）

Translated by Etsuko Odawara, PhD, OTR/L
Division of Occupational Therapy, School of Rehabilitation Sciences
Seirei Christopher University

Persch, Andrew　Pizur-Barnekow, Kris　Cashin, Susan & Davel Pickens, Noralyn（2009）
Heart Rate Variability of Activity and Occupation during Solitary and Social Engagement
Volume 16,　Issue 3,　Page 163-169

個別従事と社会的従事における活動および作業中の心拍変動

本研究は，活動と作業に従事している時の心理的，行動的および生理的な側面について研究する大規模プロジェクトの一部である．ここでは，人がボールを弾ませている時（活動）と，Yahtzee のゲームをしている時（作業）の，社交的挑戦に対する生理学的反応を調べている．方法:19-24 歳の健康な 12 人の大学生が，4 つのテスト条件（個別にボールをつく，他者とボールをつく，個別で Yahtzee を行う，他者と Yahtzee を行う）に参加した．生理学的反応は，移動式ホルターレコーダーを使用して，心拍の変動を測定した．反復測定による分散分析では，各条件による差異を測定した．結果: ボール条件と Yahtzee の条件では，心拍変動において統計的な有意差が認められた．結果: ボール条件と Yahtzee 条件では，心拍変動において統計的な有意差が認められた．遂行の型（ボールつきと Yahtzee）では，63％の個体内変動であった．個別の従事と社会的従事の条件間では，統計的有意差は認められなかった．結論:高周波の心拍変動は，個別従事か社会的従事かの差を検討するというよりは，活動と作業の遂行に伴う代謝コストを検討するための指標として有用な手段かもしれない．（訳：西方　浩一）

Key Words: Co-occupation（共作業）, Solitary occupation（個別作業）, Heart rate variability（心拍変動）

Translated by Hirokazu Nishikata, MS, OTR/L
Department of Occupational Therapy
Bunkyo Gakuin University

Mahoney, Wanda & Roberts, Elysa（2009）

Co-occupation in a Day Program for Adults with Developmental Disabilities

Volume 16,　Issue 3,　Page 170-179

発達障害を持つ成人のデイプログラムでの共作業

意味は作業において必要不可欠な要素である．本現象学的研究では，デイプログラムの１０人のスタッフと，中等度から重度の発達障害があり作業従事に援助を必要な１０人の利用者に対し，デイプログラムの活動に伴う意味を調べた．方法は，スタッフと利用者のインタビューと，利用者の中に入っての参加観察である．テーマ分析では，利用者が自発的に活動に従事し，スタッフメンバーと特有の方法で関わったときに，両者にとって活動が意味のあるものであったことが明らかになった．表れたテーマは，共作業と適切な人−環境−作業の重要性が，相容れるものであることを反映していた．（訳：近藤　知子）

Key Words: Co-occupation（共作業）, Occupational justice　（作業的公正）, Occupational engagement　（作業従事）, Intellectual disability（知的障害）

Translated by Tomoko Kondo, PhD, OTR/L
Department of Occupational Therapy
Teikyo University of Science & Technology

Pollie Price & Stephanie Miner Stephenson（2009）

Learning to Promote Occupational Development through Co-occupation

Volume 16, Issue 3,　Page 180-186

共作業を通して作業的発達を促進するために学ぶということ

子育てという作業および共作業は，作業科学と作業療法の文献だけでなく，子供の発達に関する学術誌でも報告され始めている．本論は，共作業の重要な側面と，それがどのように両親と子供の間で発達していくかについて詳細に記した論文を再考するものである．幼い子供のアンドリューとその母親ロザンナの共作業がどのように促進されるかを見つめた経験的なデータをナラティブ分析したところ，共作業が如何に両親-子供関係を強め，かつ両者の作業的，社会的，情緒的な発達の構造的機会を導くかが明らかになった．本分析により，ロザンナは，アンドリューが自分の能力を最大限に生かす方法で友達と作業に参加できるというあり方で，刻々と変化するアンドリューの特殊なニーズに答えられる能力と自信を獲得したこと示されたが，それにあたって重要であった因子を明らかにするために，交渉説（transactionism）を理論的視点（theoretical lens）として用いた．ロザンナがアンドリューに対して自信もち成功すればするほど，彼女は，社会生活におけるアンドリューのニーズをよりうまく特定し，かつ主張することをできるようになっていた．(訳：西野　歩)

Key Words: Co-occupation（共作業）, Occupational development,（作業的発達） Parent-child relationship（親―子関係）

Translated by Ayumi Nishino, MSOT, OTR/L
Department of Occupational Therapy
Japanese School of Technology for Social Medicine

3-6

Jacob, Cynthia, Guptill, Christine & Sumsion, Thelma（2009）

Motivation for Continuing Involvement in a Leisure-Based Choir: The Lived Experiences of University Choir Members

Volume 16, Issue 3, Page 187-193

レジャーの合唱団に継続的に関わるためのモチベーション：大学合唱団メンバーの生の経験

本研究では，レジャー活動として非競争的な合唱団に参加するという生の経験を探究した．半構造化された深いインタビューを用いて，9 名の大学合唱団のメンバーからデータを収集した．Giorgi（1985）による分析から四大テーマが出現した．それは，合唱団メンバーが以前にも音楽の経験があったこと，コミュニティと社会的つながりといった感覚を経験していたこと，個人的にも集団としても達成（accomplishment）を望んでいたこと，合唱がストレスを和らげ気分を改善すると感じていたことだった．合唱の経験のいくるかの側面は，小集団，または，参加者個人に特有なものであり，４大テーマとは別に，１１のテーマが導きだされた．合唱団参加は，合唱に結び付く個人の感情やモチベーションにおけるさまざまな効果を伴う個人的経験であることを，本研究は示唆した．（訳：吉川　ひろみ）

Key words:　Co-occupation（共作業）, Music（音楽）, Leisure（レジャー）, Choir（合唱団）, Qualitative methods（質的方法）

Translated by Hiromi Yoshikawa, MS, OTR/L
Department of Occupational Therapy
Prefectural University of Hiroshima

van Nes, Fenna　Runge Ulla & Jonsson Hans　（2009）

One Body, Three Hands and Two Minds: A Case Study of the Intertwined Occupations of an Older Couple after a Stroke

Volume 16, Issue 3, Page 194-202

一つの体と三つの手，および二つの精神：脳卒中後の高齢夫婦の絡み合う作業からなる事例研究

この予備的な事例研究は，脳卒中後の毎日の作業についてのある高齢夫婦の経験を理解することを目的としている．データは，脳卒中発症 3 年後に，7 ヶ月間に渡る複数の家庭訪問の間に行われた個別面接や夫婦に対する共同面接によって収集された．分析の結果，二つの個人的物語と一つの共同の物語ができあがった．主にわかったことは，彼らの現在の作業的生活が全体的に絡み合っていることであった．夫婦は毎日の作業を，そのタイミングや協調性・バランス・調整・援助において，一つの体・三つの手・二つの精神として概念化された一つの統一体として行っている．この結果は，作業についての個人主義的な考え方を批判しており，人々の相互依存性（Interdependency）および複雑な社会システム（Social system）の一部としての緊密な社会環境との相互作用に注目する相補的な考え方を提案している．（訳：渡辺　明日香）

Key Words: Co-occupation（協同作業），Interdependence（相互依存），
Social system（社会システム），Narrative methods（ナラティヴ研究法），Older people（高齢者）

Translated by Asuka Watanabe, PhD, OTR/L
Department of Occupational Therapy
Faculty of Human Sciences
Hokkaido Bunkyo University

Pierce, Doris （2009）

Co-occupation: The Challenges of Defining Concepts Original to Occupational Science

Volume 16, Issue 3, Page 203-207

共作業：作業科学における独自の概念定義への挑戦

共作業（co-occupation）は初期の作業科学で作り出された用語であり，これまでに共作業のダイナミック（動的側面）に焦点をあてた研究が蓄積されつつある．共作業が作業科学独自の概念として持続的な特質を持っているのは，学際的な遊びの研究に基づいていると同様に，母と子の相互作用に見られるような作業の社会的側面への作業科学者の興味が基礎にあるためである．共作業の本質は相互作用にある．共作業は，ある個人と別の人との両者の作業を次々と形作るものであり，二人の作業のダンスである．共作業の多くの経験はテニスのようにほとんど対称的ではあるが，これは共作業の唯一の定義ではない．共作業はかならずしも空間，時間，感情，意思を共有する必要はない．共作業を定義しようとする努力は，作業科学の概念の定義に必要な多くの課題を明らかにする．すなわち，複数の定義を受け入れる必要性，新概念の定義を立証するための論理，定義において作業を美化する傾向，作業の定義において経験と観念を区別する必要性，作業の社会的側面を過剰に強調するのに対し，作業の空間的時間的側面を十分に強調しない傾向，そして，作業科学がこれまで重視してきた個人的観点を過小評価することなく，作業の相互作用の特性を理解するための新領域を確立する必要性，などといった課題を浮き彫りにする．様々な研究者の間でこの独自のタイプの作業の研究焦点が成熟したので，このJOSの特集は作業科学にとって画期的なものとなった．(訳：青山　真美)

Key words：　Co-occupation（共作業），Occupational science　（作業科学），
Definition（定義），Theory Development（理論発展）

Translated by Mami Aoyama, PhD, OTR/L
Division of Occupational Therapy
Department of Rehabilitaion Sciences
Nishi Kyushu University